

1998年度全カリ総合B群「アジアを知る」

コーディネーター 郭 洋春

—はじめに—

その日は雨で始まった。2年目を迎えた全学共通カリキュラム。そして、「アジアを知る」。前期のハイライトの一つとも言える、駐日マレーシア大使である Tansri-Khatib 先生の授業日である。思えば、この日を迎えるまでにどれくらいの苦労があったことか。しかし、それもこれもコーディネーターである私のいつもの思いつきのせいである。

今年度の授業内容を考える際、全カリ総合B群に与えられた、年間非常勤コマ3つ、という制度を利用して「アジア各国の大使館から人を呼んで講義をしてもらおう！」等と、何の人的ツテも無しに思いつきのみで実行したところに大騒ぎの原因があった。大抵の大使館は、見ず知らずの男からの手紙を無視（考えてみれば当たり前）の行為である）したのだが、マレーシア大使館だけがわざわざ連絡をくれたのである。しかも、大使自らが話すという内容で。この話を聞いて狂喜乱舞したのと、恐れ多くてどうしていいものやら、という2つの気持ちが交差した。しか

し、学生のための授業であるのに、私が臆したから取りやめたというのは本末転倒であると思ひ、お願いすることにした。

それから、私とマレーシア大使館との悪戦苦闘のお付き合いが始まることになった。当初、大使館は簡単なメモ程度の内容紹介と依頼文を送って欲しいとのことであった。それを鵜呑みにした私は、文字通りメモ程度の手紙を書いたのである。それから、待てど暮らせど音沙汰無しの毎日... 待ちくたびれて連絡してみると、大使館宛の文書なのでフォーマルな形にして欲しいとのこと。しかし、フォーマルな文書とはどのようなものか。そのような世界とは無縁の中で生きてきた私にとってその内容や形式がどのようなものか分からず、私なりに考えて作って出してみたが、やはり今回も音沙汰知れず。恐る恐る連絡してみると、大使招聘の必要性やら、授業内容を具体的に書けなど、あれやこれやの催促の嵐。最初の話とはだいぶ違うと思ひながら、これが大人の世界かと考え直し、社会学部の Donovan 先生に添削してもらいながらようやく完成。そして、

OKの連絡。

しかし、本当に大変なのはこれからだった。大使といえども大学での扱いは非常勤講師。そこで必要なのは、履歴書の提出や給与振込先の照会など、あれやこれや大使にリクエストしなければならなくなった。最大の難関は、銀行口座の確認。まさか大使個人の口座を聞くことも出来るわけがなく、かといって大使館側も銀行振込は例がないとのこと。挙げ句の末、考え出したのは、小生による立替払い。

こんな苦勞が重なっての、当日を迎えたわけである。ここで苦勞が終われば何もここまで紙片を借りて説明するほどのことでもない。当日の対応でまた一苦勞させられた。確かに、Khatib大使の立教大学での待遇は非常勤講師だが、現実には日本でのマレーシア国代表である。私一人が、出迎えというわけにもいかないであろう。ここは全カリセンター長とともに、総長による出迎えが必要ではないか。また、授業の前後のお相手も同様になってこよう。幸い総長からは、気持ち良く快諾して頂き、出迎える場所も太刀川記念館ということになった。

当日は朝から大使館と連絡を取り合い、大使の大使館出発時間から大学の到着時間の予測など慌ただしい1日が始まったのである。当初、大使館の話では道路が渋滞しており、到着には多少時間がかかるというものであった。大学としては、既に大使到着予定時刻より30分以上前に太刀川記念館応接

室に集まっていた。と、その時、突然大使が応接室に現われた。こちらが、出迎える前に到着してしまったのである。出鼻をくじかれるとはまさにこの事だ。こちらのダメージが回復しない内に、大使は自らがホストであるかのように振る舞い、どちらが出迎えているのか、分からない状況であった。しかし、そこに大使の人柄が忍ばれて、今回さまざまな注文にも快く引き受けてくれた、マレーシア大使館の寛大さを改めて感嘆させられたのであった。

さて、本題の授業はというと、昨今の通貨・経済危機に苦しむ社会・経済問題から現在マレーシア政府が一大国家プロジェクトとして展開している情報化戦略まで、幅広い話をして頂いた。学生も、マレーシア大使ということだけではなく、普段マレーシアがどのような国なのか、よく知らないせいもあって熱心に聞き入り、質問も時間をオーバーしてまで出る始末であった。この後の、昼食会でも本学とマレーシア大使館双方からの記念品の贈呈などがあった。終始和やかな中で終えることができた。こうして、私にとって、長い1日は無事終了したのである。

—「アジアを知る」の授業内容—

ここまで書くと、98年度前期の「アジアを知る」はマレーシア大使が目玉であった、との印象を強く持つであろうが実はそうではない。今回、「アジ

アを知る」では本学専任教員 5 人、非常勤講師 4 人の計 9 人のスタッフによって授業が展開された。本学の教員と非常勤講師の取り合わせ、ならびに授業との関係では、最初に「タイ」について秋野晶二本学経済学部助教授と Chokuchai Uamponvanich 先生の二人に話をしてもらった。Chokuchai Uamponvanich 先生はタイ王国大使館の工業技官（当時）であり、日本在住歴が 7 年にも及ぶ知日タイ人である。この二人に話して頂いた主な内容は、日系企業がタイでいかなる企業展開を行っているのか。また、欧米系企業と比較した日系企業の特徴と地元での評価、についてであった。二人が共通して指摘したことは、総じて日系企業はタイで他の外国企業と比べると評判が悪いということであった。その理由としてあげられたのが、日本的経営の移転の問題性である。日本的経営とは、終身雇用、年功序列賃金、企業別組合のことであるが、アジアの社会で最も受け入れにくいのが、年功序列賃金である。アジアの国々は、身分や能力の格差によって社会的地位が歴然と異なっている。そこには、年齢など入る余地がないのである。ところが、日系企業が求めるのは、たとえ能力があっても新規大卒の給料が、役職者より多いということは有り得ないのである。しかし、アジアでは、大卒の職種も給料も他の職種に比べて高いのが当然、という風潮がある。これは、欧米型の思考様式である。従って、欧米系企業の

ように能力や職種によって歴然とした賃金格差が存在している企業にアジアの多くの労働者は、転職していく、という指摘である。さらに、この転職についても、日本ではあまり理解されない行動パターンであるが、アジアでは能力を正當に評価してくれる企業に転職するのは、その人の才能というように理解されている。これも、欧米系企業でよく見られる行動様式である。

学生はこういった、自分たちの身の回りで起きている世界が正しく、当たり前のように認識していたのが、このような話を通して、逆に日本の企業や人々の行動パターンの方が、特異である、ということを理解するにつれ、日本という国を、日本人を再認識するようになる。ここに、「アジアを知る」ことによって、日本を理解することができる契機が生まれるのである。

フィリピンについては、本学文学部梅原弘光教授とフィリピン在住 15 年というフリー・ライターの山田修先生が担当された。梅原先生の専門はフィリピンの農村社会、山田先生は政治・社会・経済問題、ということで、一見連関がないように思われるが、いまだ農業部門のウエイトが高いフィリピンでは、農村問題に対する正しい理解なくしては、都市における工業化・都市化・出稼ぎ労働者問題など、フィリピン社会全般にわたる問題を理解することはできない、ということが話された。特に、山田先生は本学の「アジアを知る」のために帰国されたわけではない

が、年に数回しか帰国せず、しかも短期間の滞在という多忙なスケジュールを、今回は「アジアを知る」の日程に合わせてくれるなど、その行為には頭が下がる思いである。また、授業のために、と送ってきたくれたメールには「レジュメ」という名の資料が、20頁にもなり、ますます恐縮する次第であった。学生には、是非とも全ての資料に目を通し、これからのフィリピン理解の一助にしてもらいたいものである。

中国については、本学社会学部教授の笠原清志先生と中国南開大学教授の李非先生をお願いした。李非先生は現在文部省の学術研究員として日本に留学中のところをお願いした。中国の話でもやはり、中国進出の日系企業の特徴を説明しながら、中国人の国民性、社会風土について講義が行われた。筆者が特に印象深かったのは、笠原先生が手元に何のノートも置かないで、理路整然と話をされ、細かい数字まで上げて説明している様子は、コーディネーターの立場を忘れ、大いに参考になるところが多かった。また、李非先生は、学生が多いに関心を持っているであろう中華料理の話も交えながら、中国社会の持つ特徴を話してくれたことは、今回の授業の趣旨を十分に理解していただいていることが十分に伝わる話であった。

最後に、本学法学部教授の五十嵐暁郎先生には、変化するアジアの政治秩序について話していただいた。講義の

導入口として、日本で店を出しているアジア料理店の歴史をひも解きながら、そこに意外な（ドラマチックな）歴史があることを紹介していただいた。そこには、その国が歩んできた歴史や日本との関係等が隠されており、異なる角度からアジア各国の料理の醍醐味を味わうことができたような思いである。肝心の国際政治の話は、ポスト冷戦におけるアジアの政治秩序の変化と日本の置かれている位置、果すべき役割などについてわかりやすく話していただき、学生も最後まで関心を持って聞いていたように思われる。

最後の授業時間には、秋野先生、山田先生、笠原先生、五十嵐先生によるミニ・シンポジウムを行った。予め学生にアンケートを取り、何について話して欲しいかを集計しておき、当日はアンケートの内容に沿って進行した。学生からの質問の中で特に集中したのは、アジアとは何か、という問いであった。それは、単に地理的な位置に対する質問というより、アジアを見る視点をどこにおくか、という質問であった。こうした質問に対し、様々な立場からの意見には、学生にアジアを見る眼の多様性を認識してもらえらる契機になった、と考える。

—全カリと専門学部の授業の違い—

「アジアを知る」には450人弱の学生が履修し、330～350名の学生が常時出席していた。教室は7号館1階の

7101 教室で、座席数はおよそ 280 席であった。従って、全ての席が埋まっても学生は入りきれず、立ち見ならぬ座り見をしている状況であった。配布資料の目算を誤り、何回も増刷したこともあった。こうして考えてみると、「アジアを知る」のコーディネーターは決して楽な仕事ではない。TA にも大分無理をさせた、という気持ちがある。正直言って、二度と引き受けたくない、という思いもある。

しかし、振り返ってみると、全カ리를担当して得たものも多い。それは、決して専門学部の授業だけを担当していたのでは、得られないものである。まず、学部を超えた多くの先生方の協力が得られ、そこから自らの学問領域を拡大させることもできた。また、全学部にまたがる学生と接触することができ、改めて自らの専門性について再認識する契機にもなった。さらに、昨今 faculty development という言葉を耳

にする機会が増えているが、その意味するところや、必要性についても全カ리의「アジアを知る」を通して知ったような気がする。

全カ리가リベラル・アーツの理念の元に発足したことは知っているが、その中身について精通している教員はどれくらいいるのだろうか。この質問に対する答えの一つは、全カ리를担当して初めて理解することができる、といったところか。もし、そうであるならば、全学を挙げて協力していくことが重要であろう。なぜならば、これは学生のための教育だからである。

今回、原稿を依頼され、執筆しながら「アジアを知る」を振り返って、以上のようなことを感じた。それだけでも全カ里とは、なかなか面白い試みである。

(かく やんちゅん 本学経済学部助教授)